

# ユーラシアンホットライン

(トピック)

## ■ユーラシア紛争地フォーラム進行状況とボランティアのお願い

3月9日(土)に、早稲田大学の小野講堂で開かれる「ユーラシア紛争地特別フォーラム」(事務局:ユーラシアンクラブ)は、9月11日以降の国際情勢の激変が、ユーラシアの紛争地にどのような影響を与えたのかを知り、アフガンやチェチェンを始めとする紛争地の背景をもとに、今後の平和と援助のありかたを考えるフォーラムです。

開催まで1か月を切り、準備は大詰めを迎えています。当日スピーカーとなるゲストもほぼ決まり、実行委員は資料作りを進めています。これから、配布資料の印刷や、チラシ配布を始めとする広報、当日の会場セッティング、会場内での誘導、記録などの人手が必要になります。ご有志の方は、ぜひボランティアをお願いします。なお、チケットは1枚千円です。皆様のご参加をお待ちしています。

なお、同封のチラシは十分な枚数を印刷してありますので、知人に配られる方、お手近に配布できる場所(職場、図書館などの公共スペース)がある方はユーラシアンクラブまでお申し出ください。直接または郵送でお渡します。

### 第1回ユーラシア紛争地特別フォーラム

日時: 2002年3月9日(土)10:00~17:00

会場: 早稲田大学 小野講堂(本部キャンパス 7号館) 新宿区西早稲田1-6-1

参加費: 1000円(資料代として)

主催: ユーラシア紛争地フォーラム実行委員会 / 事務局 NPO法人ユーラシアンクラブ

#### 第1部 現地レポート

司会: 林 克明氏(ジャーナリスト) / 在日パキスタン人団体、救援NGO代表など

#### 第2部 紛争地の歴史的背景

司会: 田中 哲二氏(中央ユーラシア調査会代表幹事)

#### 第3部 欧米先進国と紛争地

司会: 若林 一平氏(文教大学教授) / デイビット・ロイ氏(文教大学教授)、寺沢 潤世氏(日本山妙法寺)

#### 第4部 「私も言いたい！」

司会: 伊藤 憲一氏((財)日本国際フォーラム理事長、青山学院大学教授) / 一般公募のスピーカーを予定

#### 第5部 紛争地の平和と現地の人たちの生活安定のための後方支援は？私の役割

## ■~~サシマコム・チケットのご購入と販売にご協力を！~~

サシマコム来日特別公演が迫ってきました。チケットが出来ましたので是非前売り券を御購入頂くとともに友人、知人にお勧めいただきたく御案内申し上げます。

同封の振替用紙の通信欄にサシマコムチケット近江または川口と明記し、御送金下さい。公演当日振替用紙の半券(払込金受領書)をお持ち頂ければ、チケットと交換して、入場できます。口座名・番号は、

ユーラシアンクラブ 00190-7-87777

2会場とも前売券3,000円(全席自由)

なお、協賛金へのご協力も引き続きお願い致します。1口10,000円です。

2002年3月27日(水)19:00開演 東京オペラシティ近江楽堂

出演: サシマコム ウメル・ママト(ウイグルのラフツップ演奏家・作曲家) アプライティ(ウイグルのタンブル演奏家)

2002年3月29日(金)19:00開演 川口リリア・川口市総合文化センター

出演: サシマコム ソヤラ(内モンゴル・琵琶演奏家) タラー(内モンゴル・琴演奏家)

## <ヘッドライン>

(トピック)

■ユーラシア紛争地フォーラム進行状況とボランティアのお願い

■~~サシマコム・チケットのご購入と販売にご協力を！~~

(クラブニュース)

NPOユーラシアンクラブの交流キャンプ整備に参加しませんか

水源は地下150メートル、アムール川を臨むキャンプに丸太小屋を！  
—交流キャンプそして村の発展センターとして活用—

(催し物案内)

■加藤先生誕生祝賀旅行は5月の連休に実施と変更

(ユーラシア現地情報)

■新春のロシア沿海州民族村訪問のご報告

<極寒のシカチアリアジ・クラスニヤール訪問記(注) 木野保幸>

<訂政ロシア始動・井口隆太郎>

(会員動向)

■ウズベクの山本氏より年賀状

(他団体情報)

■チェチェンの子どもに学校を！  
チャリティー映画上映会

(クラブ短信)

■大野代長がベーチャ君を訪問

(企画記事)

連載<ユーラシア文化ルネッサンスの近況>第6回 大野遼

—アフガニスタンからソロフスター教徒がやってきた—

## (クラブニュース)

NPOユーラシアンクラブの交流キャンプ整備に参加しませんか  
水源は地下150メートル。アムール川を臨むキャンプに丸太小屋を！  
—交流キャンプそして村の発展センターとして活用—

### <シカチアリアン村>

アムール川に依存してきた先住民族ナナイ。ハバロフスクから北東70キロ。一万二千年前に遡る集落遺跡ガーシャや岩絵(ペトログリフ)に寄り添うように、東岸の丘にシカチアリアン村は広がっている。広さ473ヘクタール。人口300人。唯一の学校では40人の小、中学生が学ぶ。子供たちは大切にされている。親近感を感じるさわやかな笑顔。「(アムールの魚は尾を)フルフルして、パクパクウ(食う)」と歌う。ナナイ語もナナイ人もわれわれによく似ている。沿海州のウデゲ、アムール下流のウリチ、中国東北部のホジェンやオロチョン、シベリアのエベンキ等の先住民族の仲間で、太古の昔から日本人の形成にかかわる人々であった。村に産業はなく、狩猟、漁労が暮らしの支え。

### <経過>

10年前、村の発展と先住民族と日本人の交流の拠点とするため、シカチアリアン村の外れに1.5畧のベースキャンプを入手した。山菜加工セミナーを開催したり、中古ミシン40台を届け縫製試験工場を設置して、村の発展のため協議を続けてきましたが、ロシア人による裏切りで不安定化。いったんは住民75人に所有権を分筆して管理を安定化させようとしたが、住民以外の第三者の妨害で挫折。今回購入者である大野に返還したいという住民の意向で裁判を起し勝訴。第三者から取り戻し、今後「交流キャンプおよび村の発展センター」として活用することになり、新年早々にシカチアリアン村を訪問。所有権は大野、利用と管理は住民十数人で構成する「管理委員会」、利用とサポートはユーラシアンクラブの「サポート委員会」という枠組みで合意、1月12日、シカチアリアン村の村役場で合同委員会を開催しました。

### <活用>

住民側の委員は「先住民族芸能祭に使いたい」「野外博物館や子供たちのキャンプに」「運営資金を入手するためハバロフスク教育大学の芸術学科の学生の研修場所に」「建物を建て替えて観光客を誘致したい」など期待を語りました。

クラブ側は、キャンプ内の井戸水の水質がよいことからミネラルウォーターのペットボトル販売、大豆栽培と水を生かした味噌、醤油、豆腐、納豆など日本人にはなじみ深い健康食品の製造を雇用開拓をかねて提案しました。

とはいえ設備も資金も、技術も時間もかかること。クラブの交流拠点として利用しながら村の生き残りや発展のためのプランをステップ・バイ・ステップで積み上げていくことになりました。

キャンプの整備計画の第一歩として管理規約の作成と井戸の改修、ログハウスの建設を進めます。大自然に抱かれた村と住民との交流、村の発展プロジェクトへの寄付(一口2万円)を募集します。寄付金は、別記事業計画に充当され、寄付者は宿泊を無料とします。

2002年2月

NPO ユーラシアンクラブ  
シカチアリアンキャンプサポート委員会

代表 大野 遼  
委員長 木野 幸保

## (催し物案内)

### ■加藤先生誕生祝賀旅行は5月の連休に実施と変更

加藤九祚先生の80歳の誕生祝いとカラテペ遺跡発掘支援をかねたウズベク親睦旅行の日程を変更することになりました。当ニュースレターの新年号で満80歳となる2002年5月18日はさんだ旅行を提案しましたが、「平日を含み参加しにくい」という意見をいただきました。加藤先生と相談した結果、連休中の催しとすることにしました。

## (ユーラシア現地情報)

### ■新春のロシア沿海州民族村訪問のご報告

去る1月11日から14日にかけて、クラブ幹部である大野遼、木野保幸、井口隆太郎の三氏がロシア沿海州のシカチアリアン、クラスニヤールの両民族村を訪問しました。木野、井口両氏からその訪問記を投稿いただきました。なお、木野氏の訪問記は前後2回に分けて連載いたします。

### 極寒のシカチアリアン・クラスニヤール訪問記(上) 木野保幸

まだ屠蘇気分も残る2002年1月11日金曜日、新潟発15:00 DALVIA航空のツポレフがわれわれ、大野、井口両氏それに私と三人のクラブのメンバーを乗せ一路北西に向けて飛び立った。

あちこちリベットで継ぎはぎしたお馴染みのご老体ではあるが、操縦士の腕前は確か、ほぼ2時間で夕暮れのハバロフスク空港に滑りこむように着陸した。

今回の訪問目的は、クラブ代表大野氏とロシア側との10年来の係争問題であったハバロフスク区シカチアリアン村にある旧国有企業の保養施設の土地とその敷地内にある宿泊施設の所有権問題について、取得者である大野氏の所有権(厳密に言えば、土地の使用権と付属する建物の所有権)の判定が昨年、地元裁判所

からくされ、ようやく晴れて氏の所有権が確定した。その結果をうけて、ユーラシアンクラブと地元住民の交流拠点という位置付けを中核に、その活用方法や住民たちの希望を聞き出し、それをどのような形で実現して行くかのすり合わせを行うこと、さらには十年間の係争を経て、すでに老朽化著しい敷地内の施設と設備の状況把握を行い、必要とされる修理の内容とその方法や日程、費用の見積りなどを具体的に進めるためであった。

気温マイナス16度、タラップを降りると寒風に身震いするかと思いきや、さほど寒さは厳しく感じなかった。先週はマイナス30度まで下がったと、あとから地元の人から聞いた。日本もこの正月はかなり寒く、ようやく休み明けの週後半から幾分寒気が緩

んでいたのは本家本元、製造元のシベリヤ寒気団が後退したせいであろう。

防寒服のまま空港ビルに入り入国手続を終える頃には、顔から汗が吹き出し、頭から湯気が立ち上るほどであった。

待ち受けていたツーリストの女性にパスポートを渡す。ヴィザ取得の関係から今回の入国は一般観光旅行者用ヴィザであるため、ホテル滞在の裏付けに必要とかで方便上やむを得ない方法であったが、ちょっと心配であった。

空港ビルを出ると、顔馴染みのグレゴリーとニーナ村長、今回初対面のオネンコが出迎えた。グレゴリーは天候の具合を心配して2日前、わざわざクラスニヤールから待機してくれていたそう。なんとも律儀で責任感の強い男である。

あいさつもそこそこに車に乗込む。夕闇の中、白く雪におおわれたハバロフスク市街の灯を背に、木立ばかりとなった白樺林を両側に一直線続く雪の道路を走り抜ける。時折出会う大木を満載した大型トレーラが対向車線からライトをこちらに向けて向かってくる。雪道の具合で踏み固められたところを選びながら走行してくるのでたびたび路肩に退避させられた。

一時間して本道をそれ、左の支線へ、やがて30分ほどして、木立の間から灯火がチラチラみえてきた。すっかり雪に被われてはいるが見覚えのある家々がそこにあった。冬のシカチアリアン村は今回はじめてでもあり幻想的な佇まいであった。

一昨年春、昼の食事をご馳走になったカーチャおぼさんの家に厄介になる。風除けの扉を2回くぐって玄関にはいる。たちまちメガネが曇って思わず外す。カーチャおぼさんとわれわれの夕食の準備に忙しい2人のおぼさんが愛想よく出迎えてくれた。室温は25度くらいで日本の我が家より温かく快適この上ない。防寒服やら靴、帽子(ロシア式のもの)を杉山さんから拝借などの置く場所を教えてもらい、皮を一枚、二皮脱ぐ感じでようやく部屋



左から木野、井口、大野の各氏

着姿となる。

一同そろって遅い夕食歓迎会となった。ペーチャ、ピガ夫妻、スベータ、カーチャとカーチャの娘さん、サーシャ(駐在さん/警察官)夫妻、ニーナ村長、グレゴリー、他お手伝いのおぼさん。心づくしの料理とウォッカ、いつもながらの素朴な心こもった歓迎会であった。

深夜1時過ぎ、明日の朝8時半、キャンプ(解決した旧保養地)の状況を視察することと村役場での意見交換会を約して散会。見送りをかねてタバコを吸いに外に出ると満面の星空が降り注いでいた。北斗七星が眼前に迫り巨大にみえた。その東側に銀河群がもくもくと広がる煙のようにつづいていた。息をのむようなその壮大さに圧倒された。ただ、ただ圧巻の一語に尽きた。「来てよかったー!」と思わず言葉がほとぼりした。(次号に続く)

## 訂政ロシア始動 井口隆太郎

今、我が日本国は三回目の敗戦を迎えていると言われているが、そう言えば我が身も二回目の敗戦直後、正確には十八ヶ月と半月後にこの世に生を受け、警察の厄介にも救急車の世話にもならず、逆に国から表彰状の一枚も貰わず、唯齢を重ねてきたが、わが国の二回目の敗戦、否、敗戦の余韻を知る人も少教派となりつつある現在では貴重な経験をした人と言うべきか。墨田区の両国近くで育ち、物心がつき遊ぶところは三月十日の米軍の東京大空襲で焼き払われた地域の下真ん中の黒くコゲた焼ビル、或いは機関銃掃射の弾痕々しい焼校舎で、瓦礫を探せばどちらかのものか解らぬ機銃の空薬莖が沢山出てきた。三回建の焼校舎の屋上から見渡せば東は千葉市川の国府台の丘、南は晴海の石川島の造船所の工場とクレーン、西は日本橋三越本店のビルと夕方になると目立って赤く映えていた丸に越のネオンサイン、更にその向には新宿伊勢丹のビル、又更にその向には多摩の山々、北は浅草松屋のビル、その向うには筑波山と、今に比べて驚くほど視界は広がった。空を見上げれば、飛行機はホワイトスターのマークばかり。先生に聞けば「日本は戦争に敗けて三等国になり下り日の丸はつけられない。君達が頑張って一日も早く日の丸の飛行機を飛ばすのだ」と映画のワンシーンの様な会話も有りました。東京でも夏になれば天の川も見られたし、冬は流れ星も数をかぞえるのがいやになるほど見えた。そう「星の流れに身を任せ」なんて歌にもなった、パンパンも居ました。墨田区でも江戸川方面から汚穢屋さんが汲採りに来ていました。パトカーは米軍のシボレー、そうトレーラーバスなんてのもありました。テレビがないから映画に行けば必ず事前のニュース映画では(勿論白黒)朝鮮戦争のミグとセイバージェット空中戦シーンや、白衣民族の人達が戦火から逃げ惑うシーンがありました。いろいろ昔のことを思い出すまま書いてしまいましたが戦争に敗けたら古今東西悲惨な目に会わなければなりません。

この一月のシカチ・アリアン村行の経過報告は木野さんにお任

せて、ロシアが米国との冷戦敗戦後に立ち直ったか否かについて、この十二年間に十回程シカチ・アリアン村、ハバロフスクに出掛けた表向きだけの観察結果の以下に書きます。数年前の夏にルーブルの大暴落後、或いはプーチンの大統領就任後は確実に国力が方向性を定め持ち直して、上昇基調にあると思われます。初めてハバロフスクに来た十二年前は空港ロビーの外国人と云えば暗く瘦せた目付きの悪い北朝鮮の人しか居らず、インツォリストホテルのロビーも街角も警官が沢山居て社会主義・国家主義を満喫させてくれました。その後、自由を旨とする国になったら、その反動か、街に警官の姿は見えず、やたら中国人の俄行商人が目立ち、道路は穴が明いたまま、建物は傾いたまま、ホテルの便所は水が出ず、空港から自由支場までやたらとヤミ屋であふれ、日本の第二の敗戦後の風景を思い出させてくれました。

しかし、数年前より市内のインフラは整備され始め、旧レーニン広場では警官隊が気合の入った分列行進訓練をし始め、同広場に集う人々からは物心の余裕を感じました。

そして、今年一月の旅行ではハバロフスクとシカチ・アリアン村の約八十キロの国道沿の観察しか出来ませんでした。冬にも拘わらず国道は除雪され、道路は完全に整備され、センターラインは冬にも拘わらず真っ白にクッキリと書かれ、ガードレール、道路標識も新品で真すぐに立っており、寒いのにガイ(交通検問所)の警官は外で真面目に仕事をしていました。驚いたのは四十フィート大型コンテナをロシア製の新品の大型トラックが積んで何台も走っていた事です。御承知の如くこの地域の物流の主干はアムール河を利用した河川輸送とシベリア鉄道を利用した鉄道輸送で、道路輸送は専ら軍用でした。しかし、この間見たトラックによるコンテナ輸送の増加の姿は河川や鉄道輸送では解決出来ない短時間・小口輸送のニーズが高まり定着しつつあるのではないかと思われました。広大な国土の物流の自由化こそ、人間で云えば血管に血が通い始めて思考も行動も眠りから覚めた状態

と云えるでしょう。物流の活性化は新しい需要を作りました。今まで無かった場所にガソリンスタンドが三軒新設され、瀟洒なネオンサインを付けたカフェや大型トラックも止められる米国並みのドライブインやさらに進化した中華風ドライブインが軒を連ねる如く作られたのは需要があるからなのでしょう。この光景が間違いないか、もう一度、雪の消えた時期に行かねばなりません、何故か今回の旅行は帰国後ホッとしたものが有りました。敗戦の混乱から立直ったと思えました。帝政ロシア・ソヴィエトロシアを経て今、訂政ロシアが始動し始めたのではないのでしょうか。(終わり)

**(会員動向)**

**■ウズベクの山本氏より年賀状**

あけましておめでとうございます  
本年もよろしくお願ひいたします

二〇〇二年を洗ひ流したのてしょうか。最後の日、雨が降りました。年が変わろうとするころには、空には二〇〇二年が唄っている年であることを知らせるかのようには、綺麗な月が出ていました。

来半まで花火、爆竹を鳴らしていた子供たちも寝入り、サマルカンドは静かな朝を迎えました。一日(ついでに)サマルカンドの町を歩いてみました。

何かを覚え、新しい物を築こうとしているソグディアナの因サマルカンド。それがなっているか、どうしたらいいのか分からず、もがいているサマルカンドの民。しかし新年を迎えた日は、どこでもそうであるように新しい年に期待をこめられた大人も子供も歩いていました。

「三回目の正月だね。どうだい、サマルカンドはいい町だろ。」レキスタンの問に掛けに笑顔で頷き、歩いていくと先にはブル、アミールの青のドームが真っ青な空と白くしよになって大きな青の壁を作っていました。こんなサマルカンドで今年も強く、明るく、楽しく生きていきたいと思っています。皆様もお元気で過ごしてください。

二〇〇二年 一月 サマルカンド 山本 雅宣

**(他団体情報)**

**■チェチェンの子どもに学校を！/チャリティー映画上映会**

1999年から、ロシア軍と武装勢力の衝突が続いているチェチェン共和国。チェチェンのNGOからの「食糧の援助ではなく、今後のチェチェンの平和な発展のために、ストップしている子どもたちへの教育に力を貸してください」という要請を受けて、日本のNGO「チェチェンの子どもを支援する会」(東京都小平市、代表鶴元トモヨさん、主婦)が立ち上がり、チェチェンの隣、イングーシ共和国の難民キャンプで、臨時の学校を設置するプロジェクトが動きはじめました。

このプロジェクトを支援するため、「チェチェンの子どもを支援する会」と「チェチェンニュース」は、チャリティー映画上映会を行います。上映作品は「コーカサスの金色の雲」。1944年、第二次世界大戦(ロシアでは大祖国戦争)のとき、モスクワから数百人の孤児たちが、「コーカサスにゆけば、たくさん果物が食べられるよ」と言われながら、列車でチェチェンに運ばれます。そこで子どもたちが見たのは、ついさっきまで誰かがいたような、無人の町や村でした。

金色に光るコーカサスの山々からは、ときどき銃声が響いてきます。子どもたちは、この国に住んでいたチェチェン人が、自分たちといれかわりに寒い土地へ強制移住させられたと知るのでした。やがて、抵抗を続ける「テロリスト」のチェチェン人や、その子どもとの短い交流が生まれ…。

孤児出身の現代作家プリスタフキンの、弱き者への温かい視線に貫かれた小説「コーカサスの金色の雲」の映画化作品です。ぜひ、ご覧になって、チェチェンへの理解を深めていただければと思います。

日時:2002年3月23日 午前10時30分より 会場:日本映画学校試写室  
交通:小田急線新百合が丘駅前すぐ(新宿より25分) 入場料:無料

<急いで読もう!「金色の雲」> 映画をさらに楽しみ、理解するため、チェチェンニュース編集室では、原作本「コーカサスの金色の雲」(群像社刊、2800円。ユーラシアンクラブ会員の方は送料無料で)を宅配にて販売しております。ご希望の方はユーラシアンクラブか、チェチェンニュース発行人(大富亮:044-930-7860、ootomi@bigfoot.com)までお知らせください。  
[チェチェンニュース] <http://www.geocities.com/kafkasclub/che/01news/>

(編集後記) 過日、会議の後の飲み会が佳境に入った頃、若手スタッフの間から「サバ会」の発足が提案されました。サバイバル会議の略で、ユーラシアンクラブで飯が食べられるようになるための戦略を考えようというもの。来る2月23日夕刻に第1回目の会合が開かれることになりました。今後どのような展開を見せるでしょうか。楽しみです。興味のある方はぜひお集まり下さい。(い)

**<ユーラシア文化ルネッサンスの近況>第6回 大野 遼  
—アフガニスタンからゾロアスター教徒がやってきた—**

古代シルクロードの要衝、文明の十字路として知られてきたアフガニスタンは「アフガン暗黒回廊」(浜田和幸著)と呼ばれるようになりそうだ。世界貿易センタービルの自爆テロ以来、オサマ・ビン・ラディンとアルカイダ、タリバン、北部同盟。そして部族連合の新政権の動向が注目されるアフガニスタン。「古代シルクロードの要路で、なぜ、こんな事件が起きるのか?」と不審を残しているが、実は植民地宗主国にとって最後に残されたエネルギー資源として、中央アジアの天然ガス、石油資源の争奪代理戦争が、旧ソ連軍侵攻および冷戦構造の崩壊後加速がついて、翻弄された結果といえるのではないかという議論が沸騰し始めている。

旧ソ連(ロシア)、アルゼンチンの石油企業ブリダス、米国の石油企業ユノカル等、最近のいくつかの本を読んだ印象では、世界の自然資源を収奪し尽くした世界の石油資本が最後の富と利権を求めて、植民地活動の果てに蠢いているといった風だ。

「正義」も神や仏もどこにいるのかといった感のある悲惨な「報復の戦場」は、かつてはササン朝ペルシャ(3~7世紀)の国教であったゾロアスター教、マニ教、仏教の興隆した地域であった。タリバンに破壊されたパーミヤンの石窟だけでなく、ガンダーラの中心地ベシヤールも含め、アフガニスタンからパキスタンの北部は、北伝仏教の本願地、クシャン朝(1~5世紀)の支配地でもあった。アフガニスタンやパキスタンの北部地域は、日本の伝統文化の国際的背景を考える時忘れてはならない地域なのだ。

「イラン学者の伊藤義教氏の『大和朝廷とゾロアスター教徒の来日』によると、仏教だけでなく、ゾロアスター教徒もこの地域からやってきた。

トハリスタン(北アフガニスタンからサマルカンド、ブハラ)は、イスラム暦32年(652年)アラブに征服された。この地域がイスラム化するきっかけとなった時期である。西突厥の支配下にあったこの地域は、この時まで20年間で8人のハーンが交代する内紛が続く。657年最後のハーンが唐の將軍に捕らえられて崩壊する。ペルシャ学の大家伊藤義教氏は「(こうした不安定な環境下で)この時期西突厥の支配を離れたイラン系(ササン朝ペルシャ)のシャーフ:小王」がクンドゥズを拠点としてトハリスタンを支配していたが、西方からやってきたアラブのイスラム軍によって、ササン朝が、最後の大王ヤズドゲルド三世の死とともに崩壊すると、三世の息子ペーローズ(636年頃の生まれ)は東方に逃れ、670~673年に唐・長安において677年には「波斯寺(ゾロアスター教寺院)」の建立を唐朝に願ひ出たという。

伊藤氏は「トハリスタンの住民でクンドゥズ在のペルシャ人ダーラーイ(日本書紀記載の「遠阿」:小王シャーフ)が、最後の皇帝ヤズドゲルド三世の息子ペーローズを伴い長安に向かった。その後ダーラーイは、654~657年、娘を連れて日向、筑紫に到着。イラン(ササン朝ペルシャ)の再興を図った」と日本書紀に基づく解釈を示している。日本にやってきた初めてのゾロアスター教徒ダーラーイが渡来する前にもペルシャ人と見られる仏教徒が来ていたことがイラン(ペルシャ)のゾロアスター教徒、しかもササン朝王室の出自と見られる人物が来日した背景であるというのである。

ちなみに伊藤氏が日本書紀から読みとったクンドゥズ(乾豆)は、加藤九祐先生が仏教遺跡を発掘中のテルメズからアムダリヤ川の対岸アフガニスタンのマザリシャリフの東170キロ、タリバンによって爆破されたパーミヤン石窟から北200キロの位置にある。なお玄奘三蔵は、西突厥末期の643年にクンドゥズを通り内紛を現認している。

学術文化交流の一環としてカラテペ遺跡の調査を続ける加藤先生も今年で80歳。紛争地での平和と文化交流の灯火として応援していきたい。またこの3月招聘するブハラの民族アンサンブル「サシマコム」の音色からも歴史の香りを聴いてほしい。6ヶ月かかりで準備してきた「ユーラシア紛争地特別フォーラム」のチケットもできました。ぜひ多くの人に参加してほしいと思う。

**(クラブ短信)**

**■大野代長がペーチャ君を訪問**

1月14日、結核性髄膜炎で下半身不随になったペーチャ君を訪ねました。彼は自宅にいた。六畳ほどの居間で寝たきりの状態。母親と弟に面倒をみてもらう毎日。本来なら人生を謳歌する25歳。テレビ技術を学ぶ17歳の内気な青年の頃から面識のある彼は、「具合はどうか」と聞いたら、「まだ生きている」と答えました。昨年、彼の症状に合った薬剤と分量を相談した日本の医師の所見では、「リハビリも症状回復の大きな要素といふことでした。私は、お母さんや弟に、マッサージやお風呂、彼自身の努力も勧めて帰国しましたが、実際のところは途方に暮れています。ただ、お母さんから、昨年日本から送った三種の薬剤のうち一つ「イプロノール」が「よく効いている」という情報を得て希望をつないでいます。帰国後、医療支援に協力いただいている新潟大学医学部泌尿器科のピリム医師に、担当医の意見を聞いていただくようお願いしました。

発行:NPO法人ユーラシアンクラブ 発行人:大野遼 編集人:井出晃憲  
2002年2月1日発行  
住所:〒151-0053東京都渋谷区代々木2-13-2第1広田ビル  
電話/ファックス:03-5371-5548 E-mail: PAF02266@nifty.com  
Homepages: <http://homepage1.nifty.com/EURASIANCLUB/>